成育だより

NCCHD
News Letter
2026 Winter
Vol.45

特集
感染症

National Center for Child Health and Development
https://www.ncchd.go.jp

ICWH OIC / ICWH HPVって？ / 免疫アレルギー・感染研究部 / 臨床研究センター
専門職のご紹介（臨床検査技師/感染管理認定看護師） / ホスピタル・ファシリティドッグ®マサ
ご寄付のお願い / ご寄付のお礼 / もみじの家、10周年へ / Information

特集

感染症

冬の風邪や感染症、家族で気をつけたいこと

冬は気温が下がり、空気が乾燥するため、ウイルスが長く生き残りやすくなります。また、私たちの鼻や喉の防御機能も弱まります。風邪の原因となるウイルスにはいろいろな種類がありますが、中でも子どもに多いのはインフルエンザやRSウイルスです。

学校で集団発生することが多いインフルエンザは、A型の流行に続いてB型が遅れて広がることが多く、学級閉鎖になることもあります。今シーズンは前年より1カ月以上早い9月から流行が始まりました。

乳幼児がかかると呼吸困難を引き起こすことがあるRSウイルスも、かつて冬に流行していましたが、近年ではむしろ夏の流行が目立つなど一年を通じて見られるようになり、流行時期の予測が難しくなっています。

子どもの感染症の多くはウイルスが原因です。家庭内感染を防ぐためには、予防接種に加えて、家族みんなで体調を整えることも大切です。外出後はまず手洗いをし、石けんで15秒以上こすり洗いをしましょう。十分な睡眠を取り、バランスの取れた食事を心掛けることで、ウイルスへの抵抗力を高めることも重要です。

ノロウイルスなどによる胃腸炎も冬に流行することが多く、嘔吐と下痢による脱水に注意が必要です。日ごろから体調を整えておくことが大切ですが、お子さんの体調がすぐれないときは無理をさせないようにしましょう。

もし感染症にかかってしまった場合、発熱しているときは、解熱剤でつらさを和らげることができます。ただ、食事や水分が取れ、全身状態が良好であれば、熱を無理に下げる必要はありません。抗菌薬（こうきんやく／いわゆる抗生物質）は細菌による感染症を治すための薬です。ウイルスが原因の感染症には効果がないため、細菌感染のときにだけ使うことが大切です。

意識がはっきりしない、機嫌が悪い、食欲がない、水分が取れない、顔色が悪い、息苦しそう、嘔吐（おうと）を繰り返す、けいれんしているなど、様子がいつもと違うときは注意が必要です。早めにかかりつけ医や病院に相談してください。

当センターでは、基礎疾患があるなど重症化のリスクが高いお子さんへの予防接種に関する相談や、一般の方向けに子どもの感染症に関する情報提供を行っています。正しい知識と備えで、冬を元気に過ごしましょう。

Chikara Ogimi
大宜見 力
小児内科系専門診療部
感染症科 診療部長
好きな食べ物：餃子

冬の感染症の予防策

感染症対策は、
日ごろからのちょっとした心掛けが大切です。
ご家族皆さんで取り組んでいきましょう。

ワクチン

ワクチンは、病気になりにくくするために、体の中に免疫（病気と戦う力）をつけるものです。あらかじめ病原体の一部や弱めたものを体に覚えさせることで、次に本物の病原体に出会ったとき、すばやく反応して体を守る働きをします。感染症の種類にもよりますが、発症や重症化、入院、合併症のリスクを減らすことができます。家族みんなで接種することで、家庭内に感染症を持ち込む人が少なくなり、赤ちゃんや基礎疾患のある家族を守ることにもつながります（この効果を「コクーン効果」といいます）。

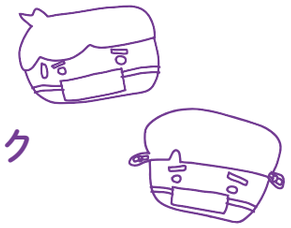
手洗い

石けんと流水で15秒以上かけて洗いましょう。手に付いたウイルス・細菌をしっかり落とすことで、ノロ、RSウイルスなどの接触感染を防ぐことができます。帰宅時・食事前・トイレの後・鼻をかんだ後に行いましょう。

換気 加湿

30分に1回を目安に、数分間換気を行いましょう。室内が乾燥しすぎないように、加湿も必要です。

マスク



インフルエンザなど主に飛沫でうつる感染症の予防に有効です。2歳未満のお子さんはマスク着用が推奨されていないため、発達の段階に応じて着用しましょう。マスクをしていないときに、せきやくしゃみをする場合は、飛び散りを防ぐためにハンカチやティッシュ、または肘の内側で口と鼻を覆いましょう。

おしえて！先生！

Q1.

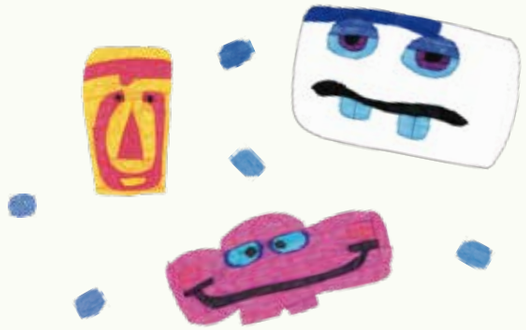
インフルエンザのワクチンを打ったのに、かかってしまうのはなぜ？

A1. インフルエンザワクチンは「完全に感染を防ぐ壁」ではありません。接種してから自分の体に免疫がつくまでに約2週間かかり、シーズンの後半には効果が少しずつ弱まることがあります。さらに、流行するウイルスは毎年少しずつ変化するので、ワクチンの型とずれてしまうこともあります。それでも、ワクチンを接種した人は入院や重い合併症になるリスクが下がることが分かっています。

Q2.

ウイルスと細菌ってなにが違うの？

A2. どちらも感染症の原因となりますが、性質が異なります。ウイルスはとても小さく、自分だけでは増えることができず、人の細胞の中で増えます。一方、細菌はそれ自体が分裂して増える「生き物」です。
抗菌薬（こうきんやく／いわゆる抗生物質）は細菌に効く薬です。そのためウイルスが原因の感染症には効果がありません。ただしインフルエンザのような一部のウイルスには、専用の抗ウイルス薬があります。



感染症科について

感染症科は、風邪から重い感染症まで、さまざまな感染症を診る専門の診療科です。原因となるウイルスや細菌を調べて治療につなげるほか、免疫が弱い方の感染予防やワクチンの相談にも対応します。子どもとご家族が安心して治療を受けられるよう、専門の医師がしっかりと支えます。

感染症に関する情報や対策を紹介しています。こちらをご覧ください。
https://www.ncchd.go.jp/hospital/about/section/kansen/fusegu/

オープンイノベーションセンター準備室

ICWH
Integrated Center for Women's Health

女性の健康総合センター（ICWH）では、「女性医学」や「性差医学」の観点から、女性の生涯にわたる健康を支えるために研究活動を進めています。これら研究成果の社会実装化を推進するために、オープンイノベーションセンターを設立し、民間企業や大学などと協力していきます。

「オープンイノベーション」とは、病院や研究所の中だけではなく、企業や大学、行政、地域の人たちなど、さまざまな立場の人が力を合わせて、新しい価値を生み出す考え方です。当センターではこの考えをもとに、「女性の健康」を中心に、子どもから大人までの「からだ」と「暮らし」を支える仕組み作りを進めています。その中核を担うのが「オープンイノベーションセンター（OIC）準備室」です。

OIC準備室では、医療現場で見えてくる課題と、社会の中で生まれる新しい技術やアイデアを結びつける〝橋渡し役〟として活動しています。妊娠・出産・子育て・更年期といったライフステージごとに変化する女性の健康課題に対する新しい研究やサービスを、企業・大学・自治体と共に探っています。医療や社会の課題を解決するため、医療の枠をこえて、データやテクノロジー、社会制度を組み合わせた新しい仕組みや方法を生み出すことを目指しています。

ICWHとOIC準備室の活動が、女性の健康を支える新たな社会モデルとして世界からも注目されるよう、国際的な場で発信していくとともに、これからも国内外のパートナーと連携し、医療・産業・社会をつなぐハブとして、未来の医療と暮らしのあり方を作っていけるよう取り組んでいきます。

活動のご紹介

1. 渉外活動

国内外の組織と連携し、女性の健康課題の研究や技術開発を推進。研究アイデアやリソースを整理・発信し、チーム形成や契約支援などで外部連携を促進しています。

2. 研究者のサポート

研究者が女性の健康に関する研究に専念できるよう、研究活動やプロジェクト管理を支援し、スムーズな研究推進のための体制を強化しています。

3. 情報発信について

OICについての概要や女性の健康について、さまざまなイベントやセミナーでお話しています。その内、最も大きかったのが、2025年に行われた大阪・関西万博です。
万博では、世界中の国々が地球的規模の課題の解決に向け、対話によって未来を作る取り組み「テーマウィーク」があり、そのフェムテックデーでICWHとOIC準備室の取り組みを紹介しました。世界の研究者や政策担当者、フェムテック企業のリーダーたちと共に、女性の健康をどう再定義し、社会に持続可能な形で取り入れていくかを議論。基調講演では、女性の健康分野への研究投資がまだ十分とはいえない現状や、医療と日常生活の間にあるギャップを取り上げ、「オープンイノベーション」がその壁を乗り越える鍵となることをお伝えしました。またパネルディスカッションでは、イスラエルやヨーロッパのリーダーとともに、イノベーションから社会に広げていく際に生まれる“ギャップ（Innovation-to-Adoption Gap）”をどう乗り越えるかをテーマに、活発な意見が交わされました。

好きな食べ物は
たこやき

Keiko Matsubara
松原 圭子
オープンイノベーションセンター
準備室長

ICWH
Integrated Center for Women's Health

女性の健康研究部門

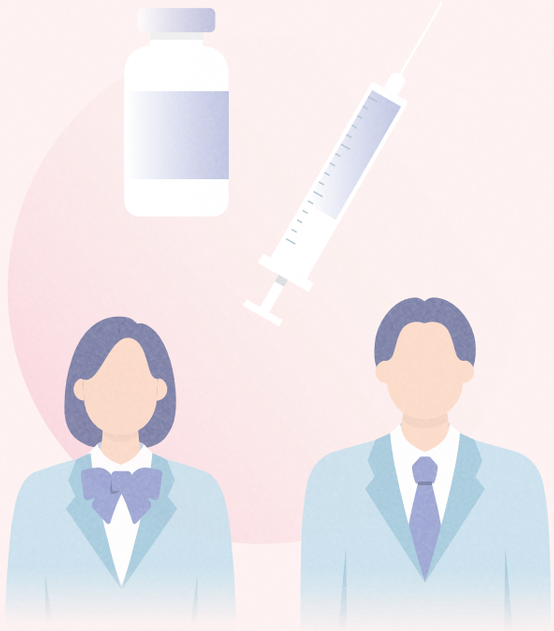
女性の健康総合センター（ICWH）では、研究活動を進め、新たなエビデンスを創出することを大きな柱の一つとしています。女性の健康の課題について研究を進めることで、女性の健康に関するさまざまな課題の解決に取り組んでいます。

ヘルスインフォマティクス研究室

ヘルスインフォマティクス研究室では、男女それぞれの食事・運動・睡眠といった生活習慣が、妊娠しやすさや自分の健康にどのように関係しているのかについて研究しています。また、母親の妊娠前や妊娠中の生活や環境が、生まれてくる赤ちゃんの将来の健康や病気のなりやすさにどのような影響を与えるのかについても調べています。これらの研究には、スマートフォンのアプリやスマートウォッチなどのデジタル機器から得られたデータを活用しています。さらに、健康に関する情報を分かりやすく伝えることや、誰もが無理なく健康的な生活を続けられる仕組み作りにも取り組んでいます。こうした「自分の生活が未来の健康につながる」という視点を広めることにより、感染症やがんを防ぐ予防医療につなげていくことを目指しています。

HPVって？

自分と将来のパートナーのために知っておきたい大切な話



HPV（ヒトパピローマウイルス）は、男性も女性もかかる身近なウイルスで、性行為などによる皮膚や粘膜のキズから感染します。HPVが原因の病気には、子宮頸がんのほか、男性もかかる中咽頭がんや肛門がんなどがあります。

HPVワクチンを接種すると、体内で抗体が作られて感染を防ぐことができ、多くの研究でその安全性やがん予防の効果が確かめられています。

日本では小学6年生から高校1年生までの女子が無料で接種できます。ただし対象年齢を過ぎると自己負担（3回で5～10万円）となります。

世界では男女ともに積極的な接種が進んでいて、東京都では区によって女子と同じ年齢の男子にも補助がある場合があります。気になる方は、お住まいの自治体の情報をチェックしてみてください。

HPVワクチンは2価、4価、9価の3種類があり、それぞれ複数の型のHPVを予防することができます。HPVワクチンは初感染を防ぐ効果があるため、性活動を開始する前に接種することが望ましいですが、性交渉の経験がある方も、まだ感染していない型に対して予防効果があります。また、ワクチンは子宮頸がんの原因となるHPVの主な型（7～9割）の感染を防ぐことができますが、全ての型をカバーしているわけではありません。ワクチンを受けた後も20歳になったら子宮頸がん検診を忘れずに受けましょう。

好きな食べ物は 桃と牡蠣

Makiko Mitsunami
三ッ浪 真紀子
ヘルスインフォマティクス研究室
室長代理

免疫アレルギー・感染研究部

鶏卵(特に卵黄)を食べてから数時間後に、赤ちゃんが何度も嘔吐を繰り返す――そんな話を聞いたことはありませんか？

もしかしたら、そのお子さんは「食物たんぱく誘発胃腸炎(FPIES・エフパイス)」という食物アレルギーかもしれません。

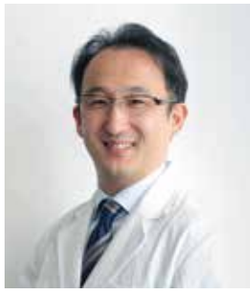
一般的な食物アレルギーというと、食べてから1時間以内にじんましんが出たり、せきが出るなど、皮膚や呼吸器の症状を思い浮かべる方が多いでしょう。

しかし、近年急激に患者さんが増加しているFPIESは、食後数時間たってから嘔吐を繰り返すなど消化器症状が現れるのが特徴で、皮膚や呼吸器の症状はほとんど見られません。そのため、食中毒や胃腸炎と誤解されやすく、診断までに時間がかかってしまうことがあります。

実は、この病気は子どもだけではなく大人にも起こることが明らかになってきています。大人では鶏卵よりも、牡蠣などの魚介類で発症する例が多いと報告されています。「牡蠣を食べるたびに強い腹痛や下痢を起こす」という場合は、FPIESの可能性も考えられます。この病気は最近になって知られるようになったため、まだ医療機関でも十分に認識されておらず、診断が難しい場合もあります。

なぜFPIESの患者さんが増えているのかは、まだはっきりしていません。アレルギー疾患は、環境要因と遺伝的素因(体質)が複雑に関わって発症します。短期間で患者数が増えている背景には、主に環境の変化が関与していると考えられています。

私たちの周りの環境は常に変化していて、今後も新たなアレルギー疾患が出てくる可能性があります。免疫アレルギー・感染研究部では、こうしたアレルギーの病気がなぜ起こるのか、その〝仕組み〟を解き明かすことで、新しい予防法や診断法、治療法の開発を目指しています。



Hideaki Morita

森田 英明

免疫アレルギー・感染研究部
部長
好きな食べ物：ルッコラ

『アレルギーの科学』という書籍を出しました。
正しく知ることで
「見えない不安」を「見える安心」
にしていきましょう。

『アレルギーの科学』
著者：森田英明.足立剛也 / 講談社

FPIESの可能性がある方、または診断を受けた方で嘔吐の症状が出た場合は、
当センターで作成したアクションプランを参照してください。

臨床研究センター

ワクチンの開発について

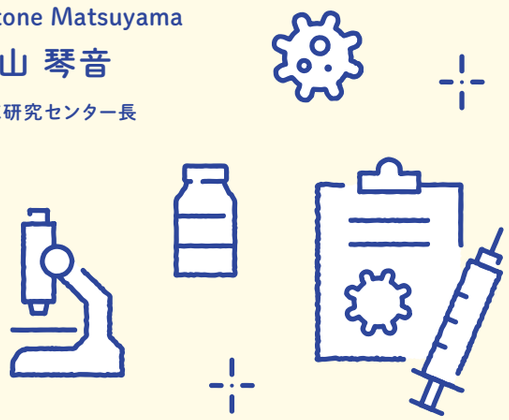
私たちのからだには、病気に打ち勝つための仕組み＝「免疫」が備わっています。ワクチンはこの仕組みを利用して、体に害のない形で病原体やウイルスの一部を取り入れ、病気に対抗する力(免疫)をつける医薬品です。代表的なものは「不活化ワクチン」で、ウイルスや細菌を完全に無力化し、安全な成分だけを使うタイプです。インフルエンザワクチンがその例です。「生ワクチン」は弱らせたウイルスを使うもので、強い免疫がつきやすく、麻しん・風しんなどのワクチンに使われています。さらに近年は、「mRNAワクチン」や「ウイルスベクターワクチン」など、新しい技術を使ったワクチンも登場しています。

ワクチンを開発し使えるようになるまでには、他の医薬品と同じように、細胞や動物を使った基礎研究や、人での臨床試験を行い、安全性や効果をしっかり確認します。全てのデータが国で審査され、品質・安全性・有効性が認められて初めて承認されます。

Kotone Matsuyama

松山 琴音

臨床研究センター長



臨床検査技師

左から 神宮司 深雪、加藤 維斗、城所 さつき

臨床検査技師は、医師が病気の原因を調べたり、治療の効果を確かめたりするために、さまざまなデータを提供するのが仕事です。臨床検査は大きく分けて、2つの分野があります。

1つ目は、患者さんからいただいた細胞や血液、尿、便、臓器といったものの、成分や微生物の有無などを調べる「検体検査」です。輸血のための検査もその一つになります。

2つ目は「生理機能検査」と言って、心電図や脳波のような体からの電気信号を測定して心臓や脳の状態を把握したり、肺活量の測定や超音波を使った画像検査によって患者さんの体の状態や妊婦さんのお腹の赤ちゃんの状態を確認したりします。

私たちは、それぞれの分野のエキスパートとして、正確で信頼できる検査データを医師に届けることで、患者さんの診療を支えています。

臨床検査技師の中でも、ばい菌（微生物）を調べる仕事をしている人は、感染症の原因を見つける役割を担っています。例えば、肺炎の患者さんの〝痰（たん）〟をもらって寒天が入ったシャーレ（培地）に広げて痰の中の菌を育てます。そこで増えてきた菌を調べて、〝どの菌が肺炎の原因なのか〟を見つけます。また、その菌に効く薬を調べて、得られたデータを医師に伝えることで、感染症の治療に貢献しています。

臨床検査技師は、医師・看護師・薬剤師と共に感染制御チーム（Infection Control Team：ICT）の一員として、環境の整備や院内感染の予防にも取り組んでいます。病棟や外来を定期的に回って、患者さんが安心して治療を受けられる環境づくりを目指しています。

的確な検査を行うためには豊富な知識と経験が求められるため、日々の学びが欠かせません。大変なことも多いですが、患者さんの治療につながるデータを提供できたときには、大きなやりがいを感じます。

Ito Kato

加藤 維斗

感染制御認定
臨床微生物検査技師
好きな食べ物：お寿司

感染管理認定看護師

感染管理認定看護師は、患者さんだけでなく、ご家族や職員、清掃を行う業者など、病院に関わる全ての人を感染症から守るために、必要な専門知識やスキルを学んだ看護師です。

日々、病院内で感染が拡がらないように各病棟をラウンド（巡回）し、手指衛生（流水による手洗いや手指消毒で、手指を清潔に保つこと）や、環境整備が適切に行われているかを確認しています。感染症が発生した場合には、速やかに状況を把握して、感染の拡大を防ぐことも重要な役割の一つです。

医師や看護師への指導や相談対応のほか、手指衛生やマスク・ガウンなどの個人防護具の正しい着脱方法についての研修、教育も行っています。また、感染症の流行状況や耐性菌の検出数を把握し、感染者が増えていないかを監視（サーベイランス）しています。感染対策は一人で行うことはできません。感染制御チーム（Infection Control Team：ICT）のメンバーと協力し活動しています。

感染管理に携わることとなったきっかけは、当センターのＮＩＣＵで感染係を経験したことでした。当時のＮＩＣＵでは、ＭＲＳＡ（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌：一般に使用される抗生物質が効かないタイプのブドウ球菌）の検出が続いていることが課題となっており、感染によって命を落とす患者さんもいました。

医師やスタッフと協力して感染対策を見直し、手指衛生の徹底や環境整備に取り組んだ結果、ＮＩＣＵのＭＲＳＡ検出数をゼロにまで減らすことができました。

「本来の病気でつらい状況にある患者さんを、感染でさらに苦しめてはいけない」その思いが、感染管理の専門性を高める決意につながるとともに、今でも私の原点になっています。

感染対策は交通ルールのようなもの。赤信号で止まるように、患者さんに触れる前は必ず手を洗う――。その「当たり前」を守る文化を育てることが、私の役割だと思っています。

Sachiko Miura

三浦 祥子

感染管理認定看護師
好きな食べ物：ナポリタン

ご寄付のお願い

命をつなぐ医療を支える

「補助人工心臓」寄付プロジェクト

重い心臓病のある子どもたちは、心臓移植を待つ間「補助人工心臓（VAD）」に命を支えられています。VADは弱った心臓の代わりに血液を全身に送り出す医療機器で、1台4,000万円、維持費も年間700万円以上と非常に高額です。診療報酬（医療費の公的補助）だけでは賄いきれず、治療の継続には皆さまのご支援が欠かせません。子どもたちの命を未来へつなぐため、寄付へのご協力をお願いいたします。

心臓移植を待っている10歳未満の子どもの数

約50人

心臓移植の適応と判断されてから移植を受けられるまでの待機期間

平均2年

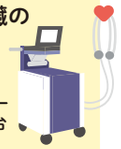
補助人工心臓の費用

本体

4,000万円／台

メンテナンス

720万円／台・年



小児の心臓移植ができる施設数

約11カ所

ご寄付のお礼

2025年度・上半期（4月～9月）にご寄付いただいた、法人・個人の方々のお名前を紹介させていただきます。

団体（敬称略）

一般社団法人Empower Children
一般社団法人日本児童文芸家協会
理事長 高橋 うらら 担当（総務委員会）あだち わかな
一般社団法人ゆうきとのぞみ
株式会社WeeSTYLE
株式会社シンラ
株式会社大和ネクスト銀行
株式会社毎日新聞社
共栄物産株式会社
三幸ハウス株式会社
資生堂ジャパン株式会社
小児がん支援レモネードパーク
DEAN FREYJA JAYNE
(freyja Dean)
東京成城ライオンズクラブ
パースペクティブ株式会社
パンケーキくん制作室
村上 隆
有限会社市瀬
有限会社佐藤精巧直線
rose of yoshi

個人（敬称略）

青柳 暁雄
赤羅 尚枝
足立 直紀
阿部 紘子
石橋 一博
伊藤 和雄
伊藤 圭吾
猪又 賢
大池 みなみ
大木 真徳
岡 知敬・麻友
岡本 三恵
織田 勝久
小田 渉
尾中 淳子
麻績 浩
柿﨑 明子
柿田 伸之
加藤 翔平
金澤 ゆう子
金子 寛昭
川島 成一
韓 宇炫
kikorist
北城 恪太郎
古賀 史健
後藤 早智
小室 靖明
小山 修司
匂坂 亘
眞田 剛辰
サンズ テオドール
品川 希
篠木 剛
新村 由加里
鈴木 克己
鈴木 美沙子
炭崎 太志
関根 裕美子
瀧 俊雄
竹下 ひと美
田中 敦子
田中 三男
田村 志保里
辻 均
角田 浩一郎
徳永 倫子
得平 幸政
冨永 裕美
長野 達也
中村 悠二
亡き夫に捧ぐ
感謝と祈りIII 米寿を生きる
門屋 倶代
ソプラノコンサート
西田 世以子
ハガ ジュン
長谷川 正允
馬場 順子
林 千加
早瀬 信行
樋口 拓郎
土方 裕美子
平井 経博
廣渡 明子
福原 かおり
藤本 恵都
プラス・ワン
古橋 礼子
星村 和友
MASA
松浦 歩生
松本 恵充
三ツ松 由紀子
武藤 圭吾
武藤 司・梓
村上 翔
村上 雄祐
森 由紀夫
安 裕一
安井 麻央
安田 功夫
矢野 雅人
山口 宏美
山﨑 佳衣の母
山田 美紀
山田 るり子
山中 ひなた
横山 真歩
吉田 知浩
渡邊 彩

ホスピタル・ファシリティドッグ®マサ

おしえて！ハンドラーさん！

当センターで患者さんをサポートしているホスピタル・ファシリティドッグのマサ。マサの感染症対策や体調管理について、ハンドラーである権守さんに答えてもらいました。

Q1.

マサも人間のように予防接種や健康診断を受けているの？

A1. 狂犬病ワクチンと混合ワクチンを毎年接種しています。また健康診断も年に2回受けて、獣医さんに体調チェックをしてもらっています。

Q2.

病棟に入る前や患者さんと触れ合う前後に、どんな感染対策をしていますか？

A2. 病院に出勤する前に、グルーミングをして、ブラッシングと体のチェックをしています。歯磨きも毎日しています。病棟に入る前や患者さんと触れ合う前には手足を拭いて消毒し、患者さんを舐めないよう、トレーニングしています。

Ayami Gonnokami
権守 礼美
ハンドラー・
小児看護専門看護師

Hospital Facility Dog Masa
マサ
犬種：ラブラドール・レトリーバー
誕生日：2019年3月7日生まれ♂

ホスピタル・ファシリティドッグ®は認定NPO法人シャイン・オン・キッズの登録商標です

もみじの家、10周年へ。

医療的ケア児とご家族に寄り添って

「もみじの家」は、自宅で人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアを受けながら暮らす子どもとご家族が、安心して滞在できる医療型短期入所施設です。きょうだいを含めたご家族で宿泊することも、医療的ケアが必要なお子さんを預けて日頃の介護を気にせずゆっくりと過ごすこともできます。

医療従事者が常駐し、重い病気のあるお子さんの日常生活を支えるほか、遊びや学びの時間も大切にしています。これまでに延べ5,000人以上が利用し、多くの方々の支えによって歩みを続けてきました。これからも「もみじの家」は、医療的ケア児とご家族にとって“第2の家”となれるよう、寄り添いながら活動を続けていきます。

「もみじの家」準備室開設から10周年を迎え、2025年11月14日には、これまでの歩みを支えてくださった皆さまへの感謝を込めて、記念式典が行われました。開設当初から関わってくださった方々をはじめ、多くの関係者が集い、10年の節目を共に祝いながら、これからの新たな歩みに思いを馳せる温かなひとときとなりました。

MOMIJI HOUSE HISTORY

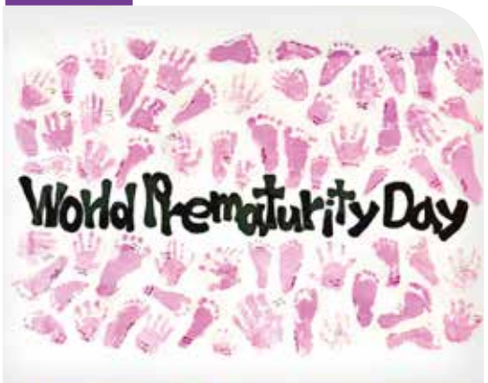
- **2015** みんなの家 準備室設備
- **2016** もみじの家 運用開始
- **2018** 上皇后美智子さまご訪問 緩和ケア病床運用開始
- **2024** もみじの家 累計利用者5,000人以上

もみじの家のご案内

人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアを自宅で受けている子どもと、そのご家族（きょうだいを含む）が最長9泊10日まで滞在できる施設です。

名　称：国立成育医療研究センター
　　医療型短期入所施設 もみじの家
場　所：東京都世田谷区大蔵2-10-1（センター敷地内）
利用料：個室 3,000～4,000円／日
　　3人部屋 2,000円／日

NICU



第4回NICU同窓会を開催

11月8日(土)に第4回国立成育医療研究センターNICU同窓会を開催しました。懐かしい保育器の展示や、500g・1,000gの赤ちゃん人形の抱っこ体験、プロカメラマンによる家族写真撮影に加え、どのお子さんも楽しめるトランポリンやブランコなどの遊び場を用意しました。NICU卒業生とご家族、医療スタッフが一緒にダンスや歌を楽しみ、心温まる交流のひとときとなりました。さらに「せいいくあかちゃんの日」のイベントのひとつとして、NICU卒業生の写真展の開催やYouTube配信も行い、NICUで頑張るお子さんとご家族へエールの気持ちを込めてお届けしました。

センター

「おりがみツリー」点灯式を開催

「おりがみツリー」とは、2012年から始まった企画で、当センター内外の子どもと子どもに関わる方々が折った折り紙を使って、大きなクリスマスツリーを作るというものです。職員のほか患者さんやご家族、近隣の学校や住民の方々のご協力もいただき、今年は23,000枚を超える折り紙が集まりました。12月4日(木)に行われた「おりがみツリー」点灯式は、医療スタッフによる演奏会も開催され、和やかな雰囲気の中で執り行われました。「おりがみツリー」は2026年1月末まで病院ロビーに展示の予定です。

センター

成育発ベンチャー第一号を認定

当センターは、株式会社Peds3(代表:千先園子)を“成育発ベンチャー”第一号に認定しました。成育発ベンチャーは、当センターで培われた臨床知見や研究成果などを社会において実用化することを目的に作られた制度で、当センターの職員が成しえた知的財産や研究成果を活用するために設立されたベンチャー企業を認定するものです。今回の認定を皮切りに、今後も成育医療の社会実装を担うベンチャーの創出と支援を推進することを通して、多くの患者さんとそのご家族のWell-beingや、社会貢献につながるよう努めていきます。

女性の健康総合センター

ICWH×プレコン
合同オープンセミナー開催

12月6日(土)、女性の健康総合センター(ICWH)開所1周年と、プレコンセプションケアセンター10周年を記念したセミナーを開催しました。第1部は「女性の健康総合センター 1年の実績とこれからの課題」と題して、小宮センター長をはじめ、女性歯科、女性精神科、OIC、データセンターの先生方が講演し、第2部では、「プレコンを当たり前の世の中にするために」をテーマに講演とディスカッションを行いました。ゲストにはノースカロライナ大学よりSarah Verbiest先生、北海道大学より玉腰暁子先生、前田恵理先生をお迎えし、日本と海外のプレコンセプションケアについてお話いただきました。

ご意見・ご感想

『成育だより』へのご意見・ご感想、
また取り上げてほしいテーマがありましたら、
QRコードからぜひお気軽にお送りください。

広報誌「成育だより」
最新号に関するアンケート

小児がんセンター

小児がん交流フェスタ 2026
開催のお知らせ

小児がんに関する理解を深め、交流の機会としていただくことを目的に、「小児がん交流フェスタ2026」を2月14日(土)に当センターで開催します。本イベントは、小児がんのお子さんやご家族をはじめ、一般の方もご参加いただけます。当日は、小児がんセンター副センター長・米田医師による「小児がんの外科治療について」の講演のほか、小児がんに関連する絵本や出版物の展示を行います。また、患者・家族会や支援団体にもご参加いただき、来場者同士が交流できる時間を設けています。小児がん経験者やご家族向けのプログラムもございますので、ご興味のある方はぜひご参加ください。一部のプログラムの申し込みは1月30日(金)が締め切りです。詳細は当センターのウェブページをご覧ください。

ビビッドな色づかいの絵がとても魅力的で、今回の表紙と特集ページ（P2～5）のイラストをお願いしました。究さんが描くバイキンや細菌たちの世界を、ぜひお楽しみください。

表紙の絵について

当センターでは、さまざまな個性を持った方々との共生を目指して、表紙イラストに障がいのあるアーティストのイラストを採用しています。思わずクスッと笑ってしまう作品、目を見張るような作品など、魅力あふれる作品をご紹介していきます。2026冬号は、当センターのサポート部門所属、究さんの作品です。

描いた人：
究（きわむ）
1997年生まれ
東京都在住

アイノカタチ基金

ご寄付について

子どもたちの命を守るための医療機器の整備や、療養環境の改善のためにご寄付をいただけるとありがたく存じます。当センターへの寄付は税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。詳細はHPをご覧ください。

https://www.ncchd.go.jp/donation/

国立成育医療研究センター
お問い合わせ

医療関係者の方

医療連携室	直通 03-5494-5486（月～金8:30-16:30）	
救急センター / NICU / 母体搬送	代表 03-3416-0181（24h受付）	
PICU	代表 03-5494-7120（内線7070）（24h受付）	

患者さん・ご家族

予約センター	病院 03-5494-7300（月～金9:00-17:00） 産科 03-5494-8141（月～金9:00-17:00）

YouTube

国立研究開発法人
国立成育医療研究センター
National Center for Child Health and Development

国立成育医療研究センター 広報誌 成育だより Vol.45
発行：国立研究開発法人 国立成育医療研究センター 〒157-8535 東京都世田谷区大蔵2-10-1 2026年1月20日発行